

インタビュー日
2020年(令和2年)12月16日(水)

小説家・「罪の声」原作者 塩田武士さん



© 森清

小説「罪の声」について

——「罪の声」^{※1}は大ヒット作品となりましたね。

ありがとうございます。

「罪の声」は私にとって9作目ですが、3作目から重版が全くかからなくなり、これで外したら終わりだという思いがありました。出版する

にあたって、編集者と共にやるだけのことはやりましたし、出版社の講談社も徹底的に推すという方針をとってくれました。ただその分非常にプレッシャーもありました。

発売から1週間たったある日、妻子を伊丹空港まで送っていったときに電話が鳴りました。「重版かかりました」「1万かけます」と。えっ、1週間で？ 初版と合わせて2万ってすごいなと思ったら、また1週間後電話がかかってきて、「重版かけます」と。えっ、2週間で？ と。そこからどんどん伸びていきました。僕の場合、小説家になるまでに12年かかっていまして、売れるまでが長かった分、本当に感慨深かったです。

—— 書き終えた時、手応えはあったのですか。

今までとは全く違う感覚がありました。虚実の歯車をできるだけ細かく組み合わせていくことで作品は面白くなるはずだという信念はあったんですが、それに見合う題材が難しかったんです。「グリコ森永事件」は、多くの人を巻き込み、大量の証拠物を残し、それでいて犯人が捕まっていない、そして幸いにも亡くなった方は確認されていない、というところにすぐみや魔力というべきものがあり、唯一無二の題材でした。

—— 本当に綿密に書かれていて、読んだ人は誰もが「これが真相とちやうか」と思いますね。

※1 戦後最大の未解決事件と言われる「グリコ森永事件」を題材に、犯行テープに声を使われた子どもの1人 曽根俊也と、文化部所属で特集のために駆け出された新聞記者 阿久津英士が共に「声を使われた子ども」の存在に着目して事件の真相に迫っていくリアリティあふれる小説。「小説現代」電子版2015年10月号から2016年1月号まで連載された「最果ての碑」を大幅に加筆修正し、2016年8月に初版され、2020年10月の映画公開時点で累計70万部突破のベストセラー。

それを目指しました。公開されている資料は全部揃え、加藤護^{※2}さんに取材して犯人像について仮説をぶつけて意見をもらったり、膨大な資料を見せていただきました。当時の地図も手に入れて実際に事件現場に足を運んで取材もしました。ハウス食品事件で犯人が車を乗り捨てた薬局が草津にあるんですが、そこで僕と同年代の店主から「当時父が車のドアが閉まる『パン!』という音を聞いた」という話が聞けました。こうした話をほぼそのまま使っています。

—— ストーリーを思いついたのは
ずいぶん前のことだそうですね。

事件に子どもの声が使われたことは21歳のときに知りました。自分と同年ぐらいの関西の子ども^{※3}の声ということは、ひょっとしたら近くにおるんじゃないかと。ふと自宅で見つけたカセットテープを再生してみたら事件で使われていた声が流れ、それが自分の子どもの頃の声だと知ったら…。プロローグはこれで決まりだと思いました。

—— そこからはすんなりと？

いえ、調べれば調べるほど事件自体が面白くなって、あるとき編集者に「全編昭和パートで書こうと思うんです。」と言ったら、「あのテープの声のプロローグはどうするんですか!」「昭和のことを書くんだったら昭和の作家が書いてます。平成の作家である塩田さん

が何で今これを書くかということの意義をもう一回考えてください!」と怒られてしまいました。そのとき、いつの間にか事件に引きずり込まれていたんだ、と自分を客観視して原点に立ち返りました。

—— のめり込みすぎて当初の発想
すら忘れたんですね。

はい。それぐらい小説って難しいなと。長編小説は本当に選択肢の連続です。全部をきれいに収めたいんですが、白々しい、いかにも伏線回収しました、みたいなのはすごく嫌なんです。それで昭和パートはリアリズムが出せると思って魅力を感じたんですが、やはり違うと、書くごとに気付かされていきました。いい小説というのは、やはり書き手にも気づきのあるものだと思います。

—— 主人公 曾根俊也の職業がテ
ラーだという発想は？

プロローグで、静かな作業をしている人が、テープの声を聞いて一気に突き落とされる、その静と動を対比させたいと思っていました。そういう職業を探していてテラーに行き着きました。それがイギリスに繋がり、犯人の挑戦状^{※4}にも繋がり、ロンドンの「外人買い」という話に繋がりました。

—— 実際にイギリスにまで取材に
行かれたとのことですが。

記者である阿久津がシェフィールド大学の近辺に住む犯人に会いに行き対峙して真相を聞くとい

う設定で、実際にシェフィールドに行きました。ただ、現地に行ってみると引っかけがなくて、ヨークの街に足を伸ばしたんです。そこは城壁があって、阿久津と犯人が歩きながら話すのにぴったりな雰囲気でした。現場で二人の会話を考えてメモしながら街の中を歩き回っていると夜8時ぐらいになり、足が痛くてベンチに座ったら動けなくなってしまいました。白夜の空を見上げて「とうとう西の端まで来た。これは絶対に失敗できない。」と思ったのを強烈に覚えています。

—— 「罪の声」がすばらしいのは、現
在の視点から過去を振り返って
それが現在につながっていき、ラ
ストは未来につながっていく、そ
こが本当に鮮やかだなと。

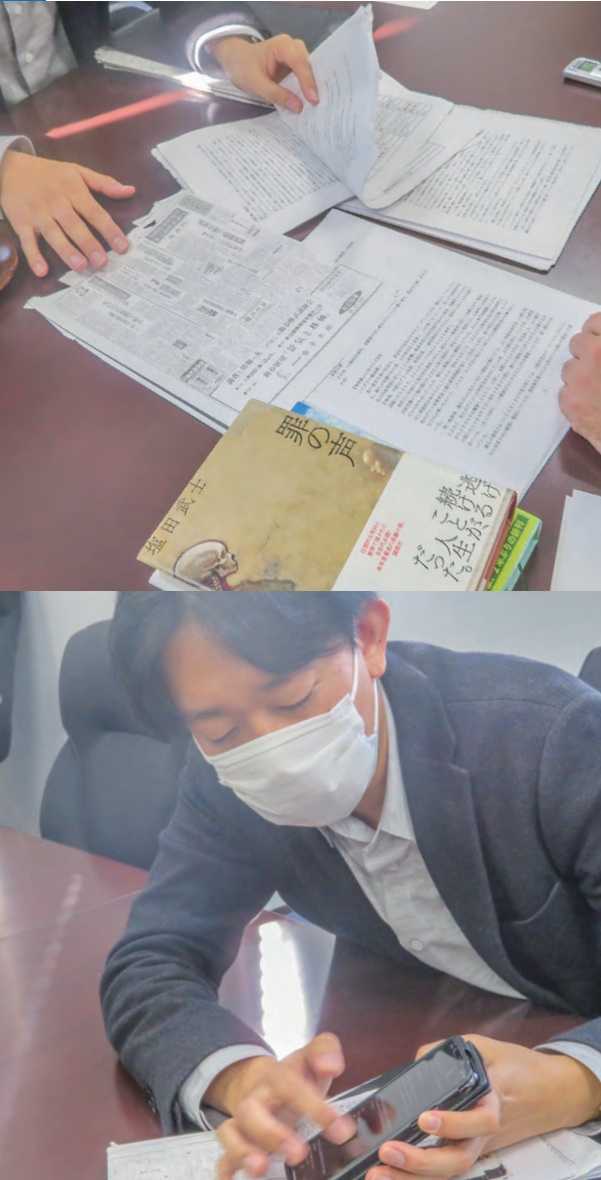
書いていて気づいたのは、現在・過去・未来の軸が通っている小説はいい小説だということです。現在と過去だけで「最果ての碑」というタイトルで連載していた頃は、まだ事件に引きずられていました。そこから3人の編集者に修正依頼と指摘を受けて曾根俊也のエピソードを足し、9日間かけてA4用紙20枚ぐらいにまとめました。それまで時間をかけて考えていたからか、それに合わせて第何章の何を消して第何章に何を加えるというようなことがすぐに見えて、それができた時点でプロットが完成していたので、書き上げるまでは4、5日ぐらいしかかかりませんでした。

—— 4、5日というのはすごいで
すね。

※2 グリコ森永事件を追いつけ、「ミスター・グリコ森」と呼ばれた元読売新聞の記者。

※3 連載開始(2015年10月)の15年前

※4 犯人グループは「ヨーロッパへ行く。来年1月に帰ってくる」という旨の挑戦状を出していた。



書いている最中に次女が産まれて、病院で自分の子をあやしなながらも、頭の中では、テープの子ども、つまり俊也のことをずっと考えていました。口の中は口内炎だらけで、とにかくゴールしなきゃと思って書き上げて午前3時ぐらいに編集者に送ったら、午前5時ぐらいに「これでいけます」と返ってきたんです。めったに作家を褒めない編集者なんですけど、最後の「了」の字の後、再校の原稿に「いい小説だ！」と書

いてあったんです。この人にこれを書いてもらえたということは大丈夫だと思いました。

—— 書き上げたときはどのようなお気持ちになりましたか？

子どもの声に着目して事件の真相に迫るというアイデアを誰かに先に書かれるんじゃないかという恐怖心が21歳のときからずっとありました。だから、やっとそれから解放されると思いました。最後の直しの「了」を打つときに、本当によくここまでこれたな、いろんな人に協力してもらったな、という感謝の思いと、これであかんかったらどうなるんやろうという不安と、いろいろな思いを感じました。書き上げた後すぐに次には行けなくて、しばらくぼけーっとしていました。

映画「罪の声」について

—— 映画也大ヒットでしたね。

映画のスクリーンで自分の名前を見たとき、とうとう夢の1つがかなったという気持ちでした。私は、映像は強さ、小説は深さだと思っています。その強さを目の当たりにした感じでした。この長い小説をまとめ切った脚本の野木（亜紀子）さんのすごさ、プロデューサーの那須田（淳）さんのキャスト・スタッフを集める力、土井（裕泰）監督の演出力、全てがすばらしかったです。小栗旬さん、星野源さんをはじめ、役者の皆さんの演技も素晴らしかったです。

—— 聡一郎役の宇野（祥平）さんもすごかったですね。

橋の上で立っているだけで、「うわっ、聡一郎がおる」と思わせる存在感でした。宇野さんは1か月かけて10キロ減量されたそうで、運動でやせたら健康的にやせてしまうので食事を抜きました、と。さらに、実際に度を入れないと目が小さくならないので、度を入れた眼鏡までかけて。だから小栗さんと星野さんの顔も見えなかったそうです。

—— 宇野さん演じる聡一郎と小栗さん、星野さんが対面するシーンは素晴らしかったですね。それに撮影場所もよかったですね(笑)。

はい。このシーンは大阪弁護士会館でなければ成立しませんでした！ 重要なシーンでお借りでき、ありがとうございます。僕も当日見学に来させていただきました。何回も同じシーンを撮るんですが、宇野さんは何回も泣いては鼻水を出して、鼻水が出過ぎと言われたら抑えて。いや、どんな訓練したらできるねんと思いましたね。

—— 「保険証持ってないんで」と聡一郎が言うセリフは、小説にも出てきますね。

あそこは書いていてどうしてもあのセリフがないと駄目だと思ったのですが、僕が頭の中で想像していたより、トーンといい、間といい、あ、この人、本当に保険証がない人生を送ってきたんだ、というところまで見せるお芝居でしたね。

創作について

—— 塩田さんは大学卒業後、新聞記者として10年勤められていまし

たね。その経験が小説作りに活かされているということはありませんか。

僕は、根本とか基礎というところに対するコンプレックスみたいなものがあるんです。例えば法曹の方だと、司法試験という難しく狭き門をクリアした段階でどっしりした基礎がある。絵を描く人、音楽をする人というのも芸大で基礎を教えてもらえる。でも、文芸は、基礎を個人の経験や考えで作っていかないといけなくて。僕の場合、その基礎の一つが新聞社の10年です。取材経験なども含めていわば最終学歴みたいな感じで捉えています。そういう基礎は大事にしていこうと思っています。

—— 「罪の声」を創作するに当たっても、沢山の取材をされたということでしたね。

取材を重ねて、生の言葉の大切さを痛感します。編集が入るとそれはやっぱり調理された食べ物みたいなものなので、素材そのもののうまみというのはやっぱり口語、人の話だと思います。情報収集において、書物も大事ですが、生の言葉とのバランスが取れていたらきっといい小説になるんだと思います。

—— 取材の中で聞いたお話とか、見たものとかはメモに残しているんですか？

気づいたことは、最近ほとんどiPhoneに記録しています。好きな言葉や気になった場面とかを全てジャンルごとに分けてメモるようにしています。記者時代に学んだのは、カテゴライズすることで

ショートカットしてやる気をキープすること。1つの袋にぼんとも入れちゃうともう人間は見ないので、ジャンルごとに分けてメモして見返せるようにしています。

—— そういうものを、シーンの一部に挿入したりするのですね。

全く行き詰まったときに、全然関係のないことを放り込んでみます。「デルタの羊」^{※5}で行き詰まったとき、主人公を元警察官という設定にして詐欺事件を引っかけたら面白くなったんです。

ただ、アイデアだけで書いてしまうのはやっぱり駄目なんです。例えば「サイドブレーキを引き忘れ、勝手に動く車、コンビニの駐車場」というメモがあったとして、それが単にサイドブレーキを引き忘れていたというだけの問題だとつまらない。そうじゃなくて、実はサイドブレーキを引き忘れていたのではない、という展開で、なぜそうなったのか、例えば誰かが乗っていて何らかの支配下にあたり、虐待に遭っていたりというところが背景にあったというのであれば、入り口は同じでも展開の仕方が全然違うと思います。

—— それは個別のシーンだけでなく、小説そのものについても当てはまりますか。

最終的に僕が必ずクリアしなければならないと思っていることが2つあって、「なぜ今書くか」と「その手段がなぜ小説であるか」。この答えが出ないと書けないです。そ

※5 アニメ業界のリアルを取材し書き上げた最新作。2020年10月発刊。



の根本のところを明確にすると「了」の字は打てると思っているので、面倒な人間かもしれませんが、そこは大事にしています。

—— 塩田さんの活動を見ていると、創作だけでなく、販売にまで気を配られていて、例えば「騙し絵の牙」^{※6}は、創作の部分と宣伝の部分が上手にバランスよく取られていると思います。

販売促進と創作というところを二律背反で見る風潮があります。銭勘定は卑し、編集は聖域みたいなところが。僕は、それはおかしい、両方で結果を出さないと駄目だと思って企画しています。売れなくても書けば良いというのは楽ですが、それが我が子だったら、何とか伸ばしてあげたいとか考える

※6 俳優 大泉洋を主人公にあて書きをするという手法で書かれた作品。廃刊寸前の雑誌編集長 速水が雑誌存続にかけて奔走する。2017年8月発刊。2021年に大泉洋主演による映画公開が予定されている。

じゃないですか。その感じです。今これを読んで欲しいねんという思いを形にする。

—— 読者のニーズも変わってきていますか？

「出版指標年報」という本を読むと、市場規模がどうやって減っていったかということが分かります。例えば、出版の市場規模は余り落ちなかったといっても、内訳を見たら電子コミックがはいだけだったりする。一つ一つ見ていくと、無策で買ったって買ってもらえないことがわかる。昔と同じわけがなくて、ネットがあって、SNSがあってという土台が違以上、方法論は必ず変わる。そうすると、編集者だけでなく、販売やライツの担当者とも接することが大切です。イベントとか物販とか、そう言った方向も何かしらできないか考える。

—— 従来の「小説家」という括りではもうなくなってきていますね。

そうですね。ただ、そういう活動も楽しいですね。知れば知るほど、いろんな人が生きていて、いろんな人生があるんだなと思うと、同年代に生きている人々という仲間意識みたいなものが湧いてきて、

それを一つ一つ書きたいなと思います。

弁護士についてのイメージ

—— 最後に、弁護士という仕事についてのイメージをお聞かせいただけますか。

記者のときは怖かったです。当時その日にあった起訴・提訴を必ずチェックしていたんですが、大体5時ごろに事務所が閉まるので、時間ぎりぎりです。訴状をもらえるかどうか交渉をしないといけない。そのとき、理屈ではやっぱり絶対に勝てない。「何で必要なんですか」という話になると勝ち目はなく、最終的には「お願いします。申し訳ないです。」というしかありませんでした。

一番印象に残っているのは、事件の被害者の方の顔写真です。顔写真を載せることに対して、なぜ載せなきゃいけないのかということは最後まで論理的には説明できなくて、事件は本当に活字だけでは読まれないということを説明しても、「いや、それはあやふやだ」ということで返されると何も言え

ません。そこでジャーナリズムを何も勉強していないことが大きいなと感じましたし、先程話したように、基礎がないことのみじめさみたいなことを痛感しました。

ただ、僕の中では、弁護士さんは、怖いけれどもきっちり基礎のある人で、信頼のできる人というイメージがあります。司法試験を突破して、そこからさらに経験を積まれて、いろいろな人の人生を見ますし、危ない目にも遭われますし、人間の悪意とか嫌なところもたくさん見られると思いますし、そういうところをくぐり抜けて幹が太くなってきた方たちなので、お話ししていると本当に楽しくて学ぶところが多いです。

—— 弁護士なり弁護士業界をテーマに小説を書いてと言われたら、どんなところに着目されますか。

ロースクールができる前とできた後の価値観の違い、その辺のものがだんだん表面化してくるのではないかと、そういうところも含めると面白いものが書けそうです。難しい試験を突破したのに、仕事がなく若い弁護士さんたちが困っているというのを聞いたときに大変驚いて、今後、アメリカみたいに、事故があったら行くみたいな感じになるんだろうかと。人数が増えるといいいところもありますが、質の部分で怖いところも出てくると思います。

—— 本日は長時間、ありがとうございました。

（ インタビュアー：森 直也
辻 村 幸 宏 ）

